

井谷 公美 氏の学位審査結果の要旨

主査：中邨 智之

副査：中村 加枝、野村 昌作

重症筋無力症（MG）は神経筋接合部のアセチルコリン受容体に対する自己抗体等を原因とする自己免疫疾患であり、骨格筋の筋力低下を来す。従来 MG の治療には高用量の経口ステロイドが広く用いられてきたが、近年はステロイドの副作用を減らすために免疫抑制剤タクロリムスを併用してステロイド用量減少を図るのが一般的になっている。本研究は、ステロイドを併用しないタクロリムス単独療法の有効性と安全性を関西医科大学附属病院において検証したオープンラベル、非盲検の前向き臨床試験である。長期治療経過を確認できた 14 名の MG 患者のうち 8 例はタクロリムス単独で 41 か月以上日常生活に支障のない状態（minimal manifestation [MM] or better）を維持できた（早期改善群）。6 例は 1 コースまたは 2 コースの強化治療（ステロイドパルス療法、免疫グロブリン大量静注療法、血液浄化療法のいずれか）を必要としたもののその後はタクロリムス単独療法に復帰した（強化治療必要群）。早期改善群の 3 例と強化治療必要群の 1 例は神経治療学会ガイドラインに則り胸腺摘除術も行った。治療前の臨床症状スコア（QMG スコア、MG-ADL スケール）はいずれも強化治療必要群の方が悪かった。長期的には 14 名全員がタクロリムス単独治療で目標レベル（MM or better）を維持しており、MG の脱ステロイド治療が十分可能であることを示した。本研究は対照群のない比較的小規模な臨床試験ではあるが、MG の治療指針に影響を与えうるものであり、学位に値する。